# 鑑賞文　短歌を楽しむ(1)

(次の文章は、和歌と短歌について解説したものである。)

一般に、明治三十年代を境にして、それ以前の作品を和歌と呼んでいます。従って、和歌の時代は『万葉集』の頃から明治中期まで千二百年以上も続いたことになります。それに対して、短歌は明治三十年代から現在まで、まだ百年と少しの歴史しかありません。

では、明治三十年代に和歌はどんなふうにして短歌へと変わったのでしょうか。その経緯について簡単に解説してみましょう。

明治の中頃まで、和歌と言えば『古今和歌集』や『新古今和歌集』の作品と直結した、完全に①様式化された表現形態と見なされていました。平安時代の貴族社会の美意識がそのまま明治にも残っていたわけです。

たとえば、満開の桜の花をうたおうとする場合でも、目の前の桜の花をただ描写すればよい、というわけにはいきませんでした。「桜」と聞いただけで、『古今和歌集』(九〇五年成立)の紀貫之の桜の歌や、『新古今和歌集』(一二〇五年成立)の藤原定家の桜の歌をただちに思い浮かべねばなりません。さらにそこに『源氏物語』などの王朝文学の情緒も取り入れて……と、膨大な予備知識が要求されます。

それらをすべて下敷きにした上で、眼前の桜をうたわなければなりませんでした。だから和歌一首作るのにも本当に骨の折れることでした。こうなると、趣味や教養の範囲を超えて、もう学問の領域と言った方がよいでしょう。

②現に、当時は歌塾と呼ばれる一種の専門学校のような機関がありました。『たけくらべ』『にごりえ』などの小説で知られる女流作家樋口一葉も、歌塾で和歌を学んでいた一人でした。歌塾「萩の舎」の優等生であった一葉が遺した和歌を読んでみますと、

A　また更にあふべき夜半のあるものをなど死ぬばかりつらき別ぞ　(別恋)

などの作品があります。

歌の意味は〈またお会いできる夜もあるでしょうに、このお別れはなぜ死ぬほどつらく思われるのでしょうか〉。

この歌をどう思いますか。恋する気持ちをしっとりとうたってはいますが、どうも型にはまりすぎた印象を受けませんか。様式をはみ出さないように、という配慮ばかりが先立って、いまひとつ実感がこもっていない気がします。小説では複雑な女ごころをあれほど見事に書き表わした一葉なのに、なぜ和歌に対しては自分の心情をさらけ出せなかったのか、不思議なくらいです。

(中略)

歌塾では、たとえば「別恋」という題を塾生に与えて、彼らが王朝和歌や物語文学の情感をいかに巧みに和歌に反映できるかを競わせたのでした。そういう背景があったために、一葉に限らず、和歌の時代にはこうした没個性的な作品が好しとされたのでした。

(栗木京子『短歌を楽しむ』岩波書店　による)

## 確認テスト

本文を読んで、問いに答えなさい。

(1) ——線①「様式化された表現形態」とはどのような表現形態か。適当なものを選びなさい。

ア 形式や方法が近代的で、洗練された表現形態。
イ 形式や方法が多種多様で、個性的である表現形態。
ウ 形式や方法が決まりきっていて、型にはまった表現形態。

〔　　〕

(2) ——線②「現に、……ありました」とあるが、明治時代の歌塾の存在を通して、筆者は何を示そうとしているのか。適当なものを選びなさい。

ア 歌塾と呼ばれる機関があるほど、和歌が趣味として人々に広く親しまれていたということ。
イ 歌塾と呼ばれる機関があるほど、和歌を作るためにはたくさんの知識が必要だったということ。
ウ 和歌の世界は貴族社会と結びついていて、歌塾のように一般社会とかけ離(はな)れたものだったということ。

〔　　〕

(3) Aの歌に対する筆者の評価として、適当なものを選びなさい。

ア 恋する気持ちがしっとりとうたわれており、一葉の心情を見事にさらけ出した歌である。
イ 様式を守ろうとしすぎたために、一葉自身の実感がこもっていないように感じられる。
ウ 古典文学の情感が巧みに反映され、一葉らしい個性的な作品であるといえる。

〔　　〕